

住井すゑと安藤昌益

安達原 達晴

一 犬田卯、住井すゑ、安藤昌益

住井すゑが夫である犬田卯に導かれ、共に農民文学運動に携わったことはよく知られる。犬田は文学による農民解放を唱え、一九二四（大正十三）年に中村屋湖らと日本最初の農民文学運動グループとされる農民文芸研究会を組織する。当時のプロレタリア文学運動が都市の労働者を中心としたのに対し、彼は農民民主主義的な「農民自治」を主張する。すべての搾取とその上に立つ権力を否定、農民自治社会の実現のための「土の芸術」の必要を唱えた⁽¹⁾。犬田・住井による共同執筆として企画され、犬田逝去の直後に刊行された『愛といのちと はだしの夫婦愛三十六年』（一九五七年一〇月、講談社）でも、犬田は「生産労働に従事する人間」を尊び、彼らの労働の恩恵に与るのみの「上層階級」を否定する。そして、自らの思想に連なる先駆者として、安藤昌益の名を挙げる。安藤昌益は江戸時代中期の医師、思想家である。長く埋もれた存

在だったが、明治三十年代に入り哲学者狩野亨吉が昌益の著書『自然真営道』の稿本を入手し、昭和初年代に狩野や渡邊大壽によって紹介されるなかで徐々に知られていく。万人が「直耕」、つまり農業の生産労働に従事し自給自足で生きていくべきと説いた⁽²⁾。昌益の具体的な思想については後述したい。ただし、先に断っておくと、本稿の目的は昌益の思想を詳らかにすることではない。あくまでも、犬田そして住井がそれをどのように受容したのかを限られた紙幅で確認することにある。

住井は大田の影響下で農民文学を手がけ、運動の実践にも積極的であった。住井が安藤昌益の名を早くから知っていたことは容易に推察される。事実、昭和三十二年の日記に「昭和のはじめ、秘密出版になった安藤昌益の『自然真営道』をひもといいた時も、あなた（犬田——稿者）は同じような（「よろこびと感激」をあらわす——稿者）顔をした。」とある⁽³⁾。昭和初年に昌益の著作と出会ったことは、住井が各所でことばを変え繰り返し語っている（後述参照）。本稿の対象は一九八二（昭和五七）年、つまり八十歳以降の住井が

示した安藤昌益への関心の痕跡だが、昌益との初遭遇はかなり以前に遡ることが可能だろう。

住井は『橋のない川』が著名だが、むろん農村や農民を主軸に描いた作品も多く残している。(農)や自然をテーマにした住井の評論、随筆も豊富にある。何より、住井は『安藤昌益全集』第十二卷(安藤昌益研究会〈代表・寺尾五郎、東均、石渡博明、泉博幸、新谷正道、和田耕作〉編集・執筆、一九八五年二月、農山漁村文化協会)の『月報』に文章を寄せていた。「感動三たび」と題したこの文章は、『住井すゑ作品集』全八卷(一九九八年一月—一九九九年八月、新潮社)にはみえない。こうした事情も影響しているのか、住井による安藤昌益への関心は犬田によるそれより注目されるのが少ないと考える。

住井が生んだ農民文学、あるいは『橋のない川』にみられる(土の文学)としての側面について研究ははまだ未開拓である。農民文学運動における住井と犬田との思想的な連帯、もしくは差異の内実に関しても追究が尽くされているとはいえない。しかし、住井を被差別部落問題を描いた作家というイメージのみにとどめず、その文学的な可能性をより大きく切り拓いていくためにこれらの課題の遂行は必須だろう。迂遠な方法かもしれないが、この作業のとは口に立つつもりで、住井と安藤昌益の関係を資料も踏まえながら少し考えてみたい。

一 一二冊の『安藤昌益全集』

牛久市住井すゑ文学館の蔵書資料中、『安藤昌益全集』全二十一

巻と「安藤昌益事典」と題した別巻(一九八二年一月—一九八七年三月、編集・執筆者と発行所は同前掲、ただし住井歿後の二〇〇四年一二月には増補篇全三巻が刊行)が存在する。住井すゑ文学館は、住井と犬田の一家が暮らした邸宅の一部を改修・改築して開館された。昌益の全集は現文学館の展示棟とは異なる、往時の状態がほぼ残された旧邸宅の居間の本棚に揃って収まっている。住井の蔵書と考えられるこの昌益全集には、なぜか第一巻のみ二冊ある(図版1)。実は二冊のうちの一冊は、和田耕作という人物から



図版1：旧住井すゑ・犬田卯郎(現牛久市住井すゑ文学館)、居間の本棚にある『安藤昌益全集』。第一巻が二冊並ぶ。

住井宛に贈られたものであった。こちらの一冊の見返しには献辞として住井の名と和田氏の署名が記され、寄贈本であることが分かる。また、献本がなされたときの住井宛和田氏書簡も調査により発見された⁽⁴⁾。

和田耕作氏について簡単に述べておきたい。和田氏は安藤昌益研究会のメンバーで、昌益全集の編集・執筆者の一人として他の五名と共に全集奥付に名を連ねる。氏は昌益の研究書である『安藤昌益の思想』（一九八九年一月、甲陽書房）を刊行している。本書も住井に献本されており⁽⁵⁾、前述した居間の本棚に昌益全集と並んで収まっていた。本書の奥付には著者略歴も紹介されている。

一九八二年十一月三十日付の和田氏書簡によれば、和田氏はかつて『民主文学』の文学教室に参加し、複数人で住井宅へ訪問したようである。『民主文学』は日本民主主義文学同盟（現在は日本民主主義文学会）の機関誌で、作家や評論家などを講師陣とした文学教室を定期的に開催している。住井は日本民主主義文学同盟の幹事に選出されており⁽⁶⁾、文学教室の講師もつとめた。また、同書簡には和田氏が雑誌『青年心理』掲載の、安藤昌益に触れた住井による文章を読み、手紙を送ったとある。教育関連の雑誌である『青年心理』第三五号（一九八二年一月、金子書房）に「新・読書のすずめ」という特集記事の一つとして住井の「読書はこれから」⁽⁷⁾という短い文章があった。

この文章中、自らの読書遍歴を駆け足でたどるなか、住井は安藤昌益との出会いについて次のように語る。

それから数年たつたのこと——農民文学仲間のK君が、安藤

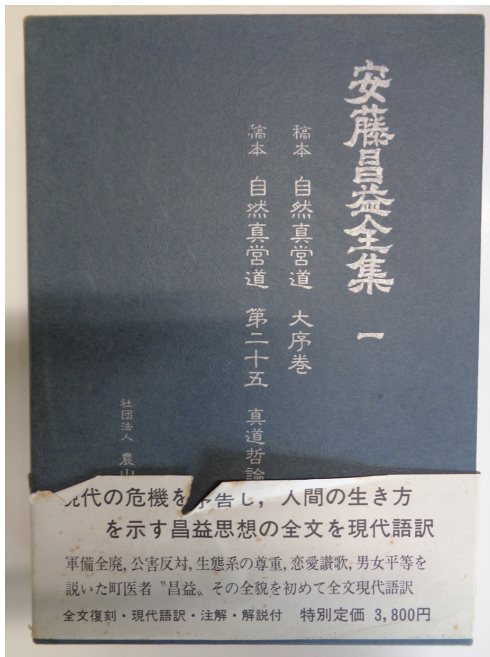
昌益の『自然真営道』をとどけてくれた。

「昌益の著書は東大の図書館に保管されていたそうなんですが、震災でほとんど焼けてしまつて、『自然真営道』だけが残つたそうなんです。それで、秘密出版ということになりました……。だから、ちよつと高くて二円です。」

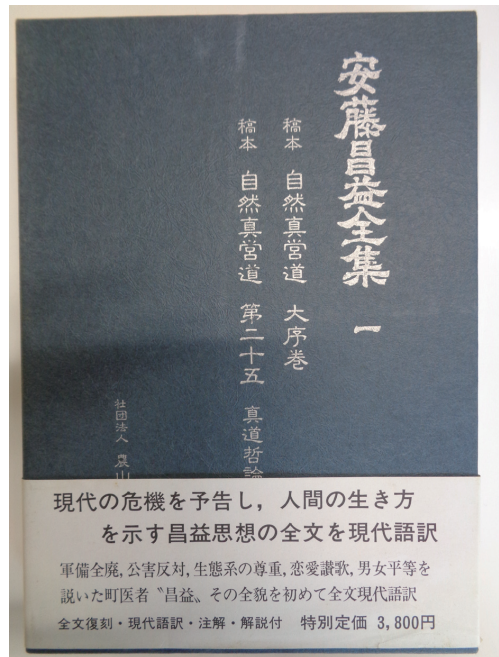
その二円本を、私たち仲間ぐるぐるまわした。秘密出版のせい、か引っぱりだこで、読み終わるとみんな興奮し、眼をかがやかせた。⁽⁸⁾

「それから数年」とあるのは、一九二三（大正一二）年の関東大震災の翌年にあつたエピソードの記述を踏まえる。また、文中には『種時く人』の創刊（一九二一年）に関する話題もみられた。書簡に戻り、和田氏は自身が安藤昌益研究会に参加していること、昌益の歿後二百二十年にあたり『安藤昌益全集』を刊行したことを伝える。ついでには住井に目を通してもらいたく、全集の第一巻を進呈する次第が述べられる。この寄贈をきっかけに住井があらためて（増補篇全三巻を除く）全集全巻を買いそろえることを決めたのかについては判然とせず、今後の調査に委ねたい。

住井・犬田邸に残された『安藤昌益全集』第一巻二冊の状態は、それぞれで明らかに異なる。まず、和田氏による献辞入りのはもう一方と比べると相対的に状態が良好といえる（図版2）。箱に付いた帯には破れなどがなく、本体もセロファンのカバーがかつたままで、消耗した印象は僅かである。他方、献辞のない一冊は箱の帯に破れが目立ち、セロファンのカバーが本体にはない。頁のところどころに紙片が葉代わりのように挟まれていた（図版3、



図版3：献辞の入っていない『安藤昌益全集』第一巻

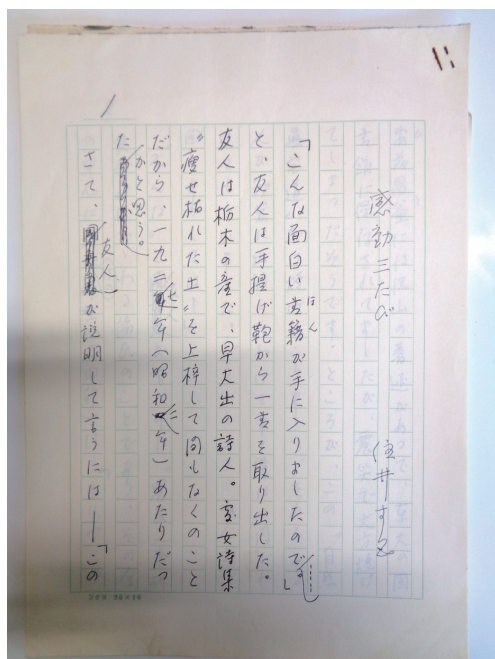


図版2：献辞の入った『安藤昌益全集』第一巻

図版4)。端的にいえば、後者には使用した（読んだ）痕跡が顕著であり、前者にはそれが薄い。住井は和田氏から送られた一冊をいわゆる保存用とし、読むときもう一冊のほうを手にとっていたと想像される⁹⁾。

住井宛和田耕作氏の書簡は他にも見つかっている。昌益全集月報の原稿拝受のお礼、月報の校正依頼である¹⁰⁾。これらの書簡と併せ、住井直筆の月報原稿も保管されているのが確認できた。おそらく、校正依頼に同封されたものだろう。原稿は二百字詰原稿用紙二十枚で右肩がホチキス留めされ、ノンブル1から20まですべて揃っている（図版5）。推敲の跡がしばしばみられ、ほぼそのまま活字化されている。月報の内容に少し触れておく。冒頭は前出「読書はこれから」で披露された昌益『自然真宮道』との邂逅が再び語られる¹¹⁾。その後は犬田の思想に昌益のそれとの具体的な類似を見出し、また犬田と歩んだ農民文学運動の顛末を同時代の趨勢も絡めながら回想する。

住井の安藤昌益に対する関心を物語ると考えられる資料を、さらに挙げる。ひとつは『安藤昌益全集』刊行元の農文協（農山漁村文化協会）が発行した新聞形式のもので、全面が昌益全集刊行や昌益にまつわる特集記事となっている。記事中、一箇所だが赤鉛筆らしき傍線が認められる。いまひとつは、『日本思想大系45 安藤昌益 佐藤信淵』（尾藤正英・島崎隆夫校注、一九七七年一二月、岩波書店）である。収録された昌益の著作には、文言に手書きの丸印などが付された頁がみられた。ちなみに、住井が「読書はこれから」の末尾に掲げた「これから読むつもりで手もとに準備している書名の一部」のなかに、「日本思想大系（全六十七巻）」とある。昌益全集



図版5：『安藤昌益全集』第十二巻『月報』「感動三たび」原稿



図版4：向かって左側が献辞入りの、右側が献辞のない昌益全集第一巻

に挟まれた紙片同様、書籍への書入れが住井以外の人物による可能性は完全には否定できないものの、これまで述べた種々の経緯を鑑みれば、記入者が住井である可能性はかなり高いといえるだろう。

三 住井文学と安藤昌益

ここからは資料も参照しつつ、住井が安藤昌益の思想のどのような点に反応したのか、より具体的にみていきたい。その前に、前掲『愛といのちと』中、犬田卯が昌益へ言及した箇所に触れておく。あくまでも犬田の目を通してだが、昌益の思想内容をあらかじめ提示したほうが住井の昌益関連資料がもつ意義を伝えやすいだろう。犬田は『愛といのちと』において、昌益の著作『自然真営道』からの「要約」としてその思想をやや詳しく紹介する。以下、犬田による記述をまとめる。

「人間は原則として働いて食うべきもの」で、「権門にこび」ず、「自然に従い、自然に生きてゆくのが、われわれ人間の道である。」つまり「農に生きること」を昌益は「自然真営の道」と名づけた。働いて、食って、眠る、「そこに人間本来の生活が存在する。」対して、「不耕貪食」、自らは労働生産をなさず他人の生産物を奪って生活する者を昌益は「極端に排斥」する。

万人がみずから耕し織つてくらせば、社会は平和である。それなのに、世間を見ると、何とそこには働かない人間が多いことか。社会を悪くするのは、実に、これら働かない人間、他人の作ったものをむさばり食う輩である。彼らがこの世にいる限

り、遂に平和はやって来ない。(12)

こうした考えをもとに昌益は「古来の人君、聖賢、学者、等々、あらゆる支配者を非難、排撃した。」

また、昌益は法世と自然世とを区別する。「法世」は人間が勝手に「おきて」や「善悪の標準」などを定めた世の中である。「そこでは法律や教義が綱を張り、「それらは人間性を殺し、独立自主の天性を奪う。さらに「働かずに、しかも富貴にくらすことを正当化」する。対して「自然世」は「むりなおきてのない、自然のままの社会」である。そこで「人は、自由であり、「誰にも束縛されることなく、また、誰をも束縛せず、おたがいに自然に生きることが出来る。」「自然に生きること」は「農に生きることである。」昌益は法世を脱却し、自然世に生きるよう叫ぶ⁽¹³⁾。犬田は次のように結ぶ。

彼はあくまでも権力を排して、自然生を強調した。自然科学的態度で物を見ようとした。無論、いまだそれは、素朴な域は出なかつたが、そして天地自然に対する解釈も、中国における五行説を出なかつたが、しかし直耕直織というところに人生の根本(モラル)を見たのは正しかった。そこに彼の説の真価がある。(14)

前掲昌益全集『月報』「感動三たび」のなかでは、住井が「農民イデオロギー」にまつわる犬田の手記の一部を引くことにより昌益の思想との類似性を示唆する。犬田は「農業は人間の協力、共働に

よってしか発達しない業」で、「人間と自然との微妙な交渉、相互扶助にはじまる」とする。また、人間と自然かつ人間同士の相互関係により「農に携^{なすち}る人間を、大自然に対しては謙虚に、人間に対しては協同的な存在として目ざめさせる。これが農民イデオロギーだ。」と述べる。さらに犬田は農民が征服、支配、搾取されてきたため、現在(文脈上、犬田が農民文学運動に従事した大正末期から昭和初年頃)は利己的、個人主義的、孤立的、独善的になっていると指摘する。したがって彼らは、「環境——社会制度——を改革すること本然の姿にかえる。」

宇宙観にまで広がる犬田の思考を掲げ、住井は「その無支配、無搾取のアナルシー(アナーキーと同義——稿者)を結果する組織の中心が、亭主にあつては協働する農民だった。」と締めくくる。友人から昌益『自然真営道』がもたらされたとき、犬田は「感動の色を見せ」なかつた⁽¹⁵⁾。住井は犬田が感動を覚えなかつたわけではなく、「あまりにも自分に近い存在をそこに見出したための、戸惑いの所為」と捉えた。自身の考えと昌益のそれとの近親性、同質性を犬田は自覚し、住井もまたそのことを感じとっていたのである。さて、次は「二」で述べた住井すゑ文学館所蔵の昌益関連資料から、住井が抱く昌益思想への関心の在処を少し掘り下げてみたい。前述した、住井が実際に手にとったとおぼしきほうの『安藤昌益全集』第一巻のうち、紙片が挟まれた頁のひとつを確認してみよう。寺尾五郎による「総合解説」の一節である。やや長いが引用する。

昌益は、人類の太古に、「百万人ガ一人」のごとく、全員が耕し平等に暮らした共同体社会があつたと想定する。そこでは

生態系は自然のままに循環し、人は労働することで自然の治癒力が充分にはたらか、みな無病息災であったという。そこにはゆつたりとした豊かさがあり、すべて自然のままであるから、上下・貴賤・貧富の差別などのない無階級社会であったとして、これを「自然世」と名づけた。

だから昌益の用いる「自然」の一語には、全存在の自り然る自己運動性と、作為の加わらぬ天然性と、権力の加わらぬ無階級性などのすべてが含意されているのである。

(中略)

昌益のいう「自然世」とは、共有・皆勞・平等・自律の共同体である。昌益は人類の太古に、神々の支配ではなく、万人直耕のコミュニケーションを見た。¹⁶⁾

続く「この「自然世」を破壊した者は誰か。／それは王であり、君であり、権力者であると昌益はいう。」とある箇所の上余白には、手書きによる赤丸印が記されている。『愛といのちと』における犬田の記述と併せると、昌益の唱える「自然世」の概念がより判然とするだろう。「自然世」とはひとつのユートピア、理想郷といえる。ここで、稿者にはある特定の空間が想起された。『橋のない川』の舞台となる「小森」、あるいはその作品空間（作品世界）そのものである。

千金楽健は『橋のない川』の「小森」、その農村地域が「近景、遠景、食事風景に至るまで」「不思議なほど肯定的なイメージで満たされている」ことに注目する¹⁷⁾。この「明るく、また、善きものとして語られ」る小森の土地に、千金楽は「美化される農村」と

いう形象をみる。加えて、山下裕作の論も援用し、「詩的真實」として「美しく語られる」農村像が『橋のない川』の基本背景である」と規定する。この農村像は被差別という「そこにあった／ある問題の告発、周知、啓発といった効果」をいっさい損なわず、むしろ「読者を作品世界に強く誘引し、作品の主題が伝達されるまで繋ぎとめる」というのである。

千金楽論は主に読者への効果という観点から、『橋のない川』の農村表象を考える。主題面からではなく、表現形式から本作へアプローチした論考で、作品解釈の新たな方向性を開いたといえるだろう。一方、本稿の主旨に引きつけるのなら、こうした作中の農村風景にはやはり住井、遡れば犬田の思想的な源泉を求めることが可能ではないかという問いが生まれる。読者から作者へ目を転じたとき、小森の人々の勤勞ぶり、自然と寢食をともにするかのような生活風景は、住井と犬田が共有したと考えられる安藤昌益の思想の前提をなす「自然世」の世界と重なってくるのではないだろうか¹⁸⁾。

「自然世」を実現するための闘争過程に身を投じた軌跡そのものが、犬田の人と文学であると断じるのはいささか乱暴かもしれない。しかし、犬田の志を継ぐ意気で『橋のない川』執筆にかかった住井¹⁹⁾が安藤昌益を経由し、虚構世界に闘争の終着点としての「自然世」理想郷を定着させようと試みたという想像は、ひとつの可能性となり得るのではないか。むしろ、『橋のない川』に徹頭徹尾、牧歌的な世界のみが描かれているわけではない。当然そこには、住井蔵の昌益全集に赤丸印が刻された、「自然世」の破壊者「王」「君」「権力者」が登場する。したがってより厳密に言えば、本作は「自然世」と「法世」の相克を住井なりに物語化していると

捉え直すことができるかもしれない。

四 『橋のない川』の思想的水脈―むすびに代えて―

本稿では住井蔵の昌益全集を中心とした資料も参観しつつ、住井文学と安藤昌益が唱える思想との関わりについて些少なから考えてきた。犬田同様、住井にもまた昌益の描いた世界像がたしかに流れ込んでいる。本稿では問題提起にとどめたが、千金楽が指摘する『橋のない川』の「美化される農村」へ、思想的な裏づけを備えた理想郷（「自然世」）のイメージを新たに加え得る可能性にも触れた。本作が被差別を題材およびテーマとするのは間違いない。しかし、住井と犬田の作家的、社会運動家的な来歴を再確認しつつ、本作を形づくる複数の思想的な水脈を探索する作業は必要だろう。「感動三たび」で住井は次のように述べる。

百年、二百年後の読書子は、橋のない川は、老子、荘子、昌益、秋水（幸徳秋水——稿者）の思想の系譜につながる。と理解してくれるのではなからうか。⁽²⁰⁾

今後は、『橋のない川』をひとつの思想小説として読む視点も検討できる。前掲『昭和三十二年日記』には、犬田の意志を継いで「百姓と特殊部落」という「被压迫階級の解消」へまなざしを向ける住井のことがある。雑誌『部落』座談会でも、「未解放部落の解放と農民解放の問題は二つの別個のものではない」⁽²¹⁾と住井は訴える。ただし、住井（また犬田）の主戦場、闘争の手段は文学で

あり、小説、フィクションであつたはずである。『橋のない川』連載は『部落』一九五九年一月号から始まった。その直前、本誌一九五八年六月号に「部落解放のための文学を」と題した住井の文章が掲載される。

人間は平等だ、差別は不当だと力んだり思ったりしてみたところで、差別的な感覚は今のところどうしようもないのですから、その感覚を是正させるには、やはり別な感覚をもってするしかないのだと私は考えています。そしてそれは文学の中から受取るしかないしそれの中にしか発展しない性質のものだと信じています。⁽²²⁾

右の箇所は『橋のない川』の主題と同時にその方法をも示唆するようにみえ、興味深い。予定した企図が実際に果たされたのか否かについては、慎重に検証すべきだろう。しかし、『橋のない川』の住井が虚構フィクションのなかに「別な感覚」を生み育てようと目指したことは、けつして無視できない。おそらくこの「別な感覚」は、「詩的眞実」として「美化される農村」、あるいは昌益の「自然世」を彷彿させる理想郷的な農村空間を生きる人々のなかに象られていると考えられる。もし仮に、本作に「別な感覚」という大河が流れているのだとしたら、そこに接続する支流のひとつに安藤昌益の思想を数えることは可能であるといえる。

注

(1) 以上、犬田に関する記述は『日本近代文学大事典』第一巻

- (1) 日本近代文学館・小田切進編、一九七七年十一月、講談社
 「犬田卯」の項目（執筆者・小田切秀雄）による。
- (2) 以上、安藤昌益に関する記述は『日本人名大事典』第一卷（一九七九年七月、平凡社）「安藤昌益」の項目（執筆者・藤井甚太郎）および『国史大辞典』第一卷（一九七九年五月、吉川弘文館）同項目（執筆者・尾藤正英）による。また、昌益についてはエドガートン・ハーバート・ノーマン『忘れられた思想家・安藤昌益のこと』上下巻（大窪愿二訳、一九五〇年一月、岩波新書）にも詳しい。後述する昌益全集『月報』の住井による文章もノーマンの本書に触れる。ちなみに、牛久市住井すゑ文学館所蔵資料中には『ハーバート・ノーマン全集』第一卷（一九七七年四月、岩波書店）の月報も見つかっている。安藤昌益については前掲本論「二」の和田耕作氏による著書を含め多くの書籍があるが、本稿冒頭で述べた意図により事典の記述を踏まえるにとどめた。
- (3) 飛鳥川みつぎ「大田卯・住井すゑ『昭和三十二年日記』翻刻・解題」（『東海大学日本語・日本文学 研究と注釈』第八号、二〇二四年二月）、一六頁。
- (4) 著作権等を考慮し、本稿では内容の一部を紹介するのみにとどめ、書簡本文の引用は控える。
- (5) 昌益全集第一巻と同様、和田氏による献辞が確認できる。
- (6) 日本民主主義文学同盟から住井に宛てられた、一九六九年三月二十九日付の幹事選出通知が住井すゑ文学館に残る。
- (7) 住井すゑ『いのちは育つ 抱樸舎から』（一九八五年十一月、人文書院）、『住井すゑ作品集』第七卷（一九九九年七月、新潮社）にも収録。
- (8) 前掲『青年心理』第三五号、一二六頁。傍点は原文のまま。
- (9) むろん、住井以外の者（例えばご家族、ただし全集の刊行年から犬田卯は除外される）が全集を読んだ可能性は完全には否定できない。しかし、これまで述べた第一巻寄贈の経緯、また後述する『日本思想大系』所収、安藤昌益の巻のことも併せて住井本人が読んだとみてほぼ間違いないのではないだろうか。
- (10) ちなみに、校正依頼は一九八五年十一月十五日付。
- (11) ただし、「読書はこれから」では「農民文学仲間のK君」とされた人物が、『月報』ではやや詳しく素性を明かされ、最後の「附記」では実名も記される。
- (12) 前出、犬田卯・住井すゑ『愛といのちと はだしの夫婦愛 三十六年』、一七九頁。
- (13) 加えて昌益は、「自然世」の「生活」とは「互性活真」の「生活」と述べているようである。「互性活真」は昌益の思想において重要な概念と考えられるが、犬田による記述の詳細については省略する。
- (14) 注(12) 前掲書、一八一頁。
- (15) この住井が語る犬田の見かけの反応は、本稿「一」で触れた『昭和三十二年日記』の記述と異なる。
- (16) 『安藤昌益全集』第一巻（一九八二年一〇月、編集・執筆者と発行所は同前掲）、一六頁。全集第一巻中、紙片が挟まった箇所や印の付された箇所は複数あったが、本稿で提示できたのはごく僅かである。別稿を期すこととしたい。次に、紙片が

- 挟まった昌益著作本文の現代語訳（執筆分担は特に明記されず）の部分のひとつだけ引用しておく。第一巻二四七頁で『自然真営道』『真道哲論巻・問答語論』の一節である。引用文中、良中とは昌益のことである。昌益のこのことばには手書きによる丸印が付されている。「／」は改行を示す（本論中の引用も同じ）。「湛香が三たび質問して言った、「道とは、活真の精妙な自己運動だと考えますが、どうでしょうか」。／良中先生が言われた、「端的に言えば、道とは直耕して食うことだ。活きる真なる道とは、これ以外でも以内でもない」。／中香が言った、「道とは、活真の自己運動、つまり矛盾関係をもって通横逆の循環運動をしている八気の精妙な法則のことだ。これ以外のものではない。活真の精妙なたらきとは、ただ一つ、食って着ることだ。天地・人間・万物は、食うということで常の命を保っている。（以下略）」
- (17) 千金楽健「住井すゑ『橋のない川』の背景世界 「ノスタルジ」を喚起する「美化された農村」、『国文学言語と文芸』第一四〇号、二〇二五年二月。
- (18) ただし、千金楽は「なつかしさ」「ノスタルジー」をめぐる議論も展開しており、作中の奈良の農村は奈良出身の住井にとって「なつかしさ」の源と言える存在だったはず」と述べる。
- (19) この点については住井自身がたびたび述べており、周知の事柄といえる。
- (20) 前掲「感動三たび」、「安藤昌益全集」第一二巻「月報」、四頁。
- (21) 『部落』一九五八年六月号、四一頁。目次に「第三回部落解放全国婦人集会から」と題された特集記事の一つである座談会記録「三つになった婦人集会―その成果と課題を集会参加者が語る―」。
- (22) 『部落』一九五八年六月号、五三頁、傍点は稿者による。読者の近況、経験談や意見などを集めた投稿欄「東西南北」中の短い文章。
- ※引用文については、ルビを一部省略したものもある。
- ※本稿は、科研費事業でもある牛久市との共同調査研究の成果を踏まえている。特に牛久市住井すゑ文学館学芸員で牛久市環境経済部文化財・シャトー推進課の有蘭舟仁氏をはじめ文学館の皆様、推進課の皆様には多くのご高配を賜った。この場を借りて深く感謝申し上げる。
- ※本研究はJSPS科研費JP25K03851の助成を受けたものである。

Abstract

Examining the Relationship Between Sue Sumii and Shōeki Andō

ADACHIBARA Tatsuharu

This paper examines the relationship between the writer Sue Sumii and Shōeki Andō, a physician and thinker of the mid-Edo period. Sue's husband, the writer/scholar of peasant literature Shigeru Inuta, held Shōeki's ideas in high regard. Sue, who was strongly influenced by Inuta's thinking, also showed an interest in Shōeki. Among the materials held in the Sue Sumii Literary Museum in Ushiku City are the *Complete Works of Shōeki Andō* and letters from one of the editors and contributors to the collection. Drawing on these materials, we shall examine the specific nature of Sumii's interest in Shōeki's thought.

Shōeki Andō distinguished between the "world of law" and the "world of nature." The "world of law" is a society in which humans arbitrarily establish rules and standards of good and evil. These rules and standards stifle humanity. Conversely, the "world of nature" is a society left to its natural state. There, people neither constrain others nor are themselves constrained, living naturally with one another. Essentially, they live by farming. Sumii clearly sympathized with these ideas of Shōeki. The "world of nature" advocated by Shōeki seems deeply connected to the fictional world within Sumii's masterpiece, *The River With No Bridge*.